
親友に巻き込まれて異世界に飛ばされた(仮)

秀一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友に巻き込まれて異世界に飛ばされた（仮）

【Nコード】

N3879X

【作者名】

秀一

【あらすじ】

俺、佐藤和真は親友の神崎晃の二人で下校していた。

家まであと少しというところで晃は突然悲鳴を上げる。俺は晃が空間の裂け目に引っ張られているのを目にした。俺は晃に手をつかまれ、晃を引っ張るが、結局晃とともに裂け目に引っ張られてしま

プロローグ（前書き）

初めまして。秀一です。この作品は作者の暇つぶしで書いています。わからない表現や誤字脱字があります。温かい目で見守ってもらえるとうれしいです。

プロローグ

学校の帰り道。

俺、佐藤和馬と親友の神崎晃は当然のように自分たちの日常に暮らしていた。

高校一年の四月末。入学してから少し経った今日、俺ではなく親友の晃は今

「好きです！私と付き合ってください！」

同じ一年の女子から告白をされていた。

これで入学してから5人目の告白だ。そう晃はモテる。美形で優しく誰に対しても明るく接する。

対して俺は、自分では普通よりは少しいいほうだと思ってる。しかし、晃の隣にいと霞む。

晃は月に何人もの女子から告白をされている。しかし晃は告白されても一度も承いていない。昔、理由を聞いてみたところ晃曰く

「恋はかっこいいから、可愛いからじゃなくてもっとこう、最初は友達から、みたいな感じじゃないのか？」

と言われた。

可愛い子が告白しても全く了承しないことから、一時期、晃は和馬と付き合っているのでは？という噂が流れた。おかげで俺は男子

に避けられ、女子からはライバル視されるという迷惑な事件が起きた。

一番ショックだったのは、好きな子に誤解されたということだ。告白しようと放課後に屋上に呼んだ。深呼吸を一つして告白しようとしたら

「晃君は渡さないから」

といきなりのライバル宣言。咄然としている中その子は晃の素晴らしいことや晃のどこが好きなのか、晃のことをどれだけ好きなのかなどを一時間ほどしゃべってから最後に

「絶対に負けないからね」

と言いついて帰って行った。

もちろん俺は落ち込んだ。そんな俺を晃は「何があつたんだ？」

と俺を励まそうとし、俺は女子に睨まれさらに落ち込むという負の連鎖。

今ではほとんどの人の誤解は解けた。一部ではいまだに信じている奴がいる。当然あの子は信じている。なんでやねん……

おっと、昔のことを思い出していたら、女子の告白を断りこちらに向かつて晃は歩いてくる。晃の後ろでは女子が俺のほうを睨む。

俺は何もしていないのに……

その後はいつものように晃と駄弁りながら歩く。晃とは家が隣同士なので途中で別れるということはない。

晃とは昔から一緒にいたので晃と比較されることが多かった。運動でも勉強でも何をしてても晃には勝てなかった。何かあるたび周りか

らは「晃君を見習いなさい」と言われた。

そのたびに晃は「気にすることはない」と俺に言ってくれた。けどどんなに努力をしても晃には勝てなかった。好きな人ができてみんな晃に持っていられる。告白しようとすればライバル宣言されてしまいかわなかった。

晃は親友だ。俺はそう思っている。だけど晃はどう思っているのだろう。…親友と想ってくれているのだろうか。自分の引き立て役だと思っているのだろうか。

晃は親友だ。俺は…本当にそう思っているのだろうか？

「うつ、うわああああ」

突然晃が悲鳴を上げる。俺は思考を切り上げ晃を見る。

どうやら左腕を誰かに引つ張られているようだ。

一体誰が？

晃の後ろには誰もいなかった。だが黒い何か、いや空間の裂け目のようなものに引つ張られているようだ。

「か、和馬助けてくれえ！」

晃はそう言っ俺の左手を掴んでくる。

「ちよつ、！！！」

俺は晃を引つ張るが引き戻せない。それどころか裂け目に引つ張

られていく。何とか耐えようとするがすぐに限界はやってきた。

「うああああああああ」

二人の悲鳴は途切れ裂け目とともに姿を消した。

それは、家までわずか三分の距離。

第一話

「ぐわぁ、つつ」

ドサツ、と地面に落下する。物音は一つ。

和馬は小さく呻きながら尻を撫でて立ち上がる。

そこは通学路ではなく、鬱蒼と木が生い茂り、足元には大量の落ち葉が敷き詰められている。上を見上げると木から伸びた枝葉が太陽の光を遮り薄暗い。

ブレザーを着ているはずなのに僅かに肌寒く、木の幹にいる虫はやたらと大きい。

とりあえず軽くあたりを見回し晃の姿を探すが見当たらない。

「おい、晃ぁーどこだぁー！返事ろー！」

大声で読んでみるが反応は無い。もう一度呼ばうと口を開きかけたとき

ガサツガサツ

右のほうから何か物音が聞こえた。

晃は足でもくじいてしまつてのだろうか？

俺は物音がした方へ歩き出す。乱雑に生えた草や落ち葉が安定感をなくす。少し手間取りながら歩く。

ガサッ

先ほどよりも大きい物音。どうやら晃は近くにいららしい。

「おーい、晃あー大丈夫かあー」

そう呼びかけながら少し開けた場所に出た。しかしそこに晃はいなかった。

「……は？」

だがそこには体長3メートルはあるデカイクマと血まみれで倒れているニメートルほどのイノシシがいた。晃の姿はない。

だが今はそんなことどうでもいい。問題は巨大なクマっぽいやつだ。明らかに俺に敵意を向けている。鋭い爪からは血が滴っており、口からは炎らしきものが漏れ口のまわりについている血を焦がす。

どうやら食事中だったらしい。

「ウソだろ……」

俺の小さなつぶやきクマは雄叫びを上げる。そして口を大きく開け炎を噴出した。

「っあぶねえ！」

俺は反射的に木を盾にして避ける。炎は木に当たり音を立てて燃え上がる。俺は一瞬で悟った。逃げなくては死ぬと。

それからひたすら背を向けて走り続けた。足元に注意していないと転びそうになる。転んだら最後、俺は殺されるだろう。しかし足元ばかりを気にすると木が当たる。当たれば死ぬ。

さらにクマはたまに炎を吹き出してくる。下、前、後ろすべてに気を付けながら走る。体中から汗が止まらない。

（なんで？どうして俺がこんな目に遭わなくちゃならないんだよおお）

涙で視界が滲む。

死にたくない。そう思いながら俺はひたすら走った。

どのくらい走ったのだろう？気が付くと俺は倒れていた。聞こえるのは自分の激しい息遣い。クマは……いない。逃げ切ったようだ。若しくは見逃したのか。俺にはどちらでもよかった。

（どうしてこうなった？） 晃に巻き込まれたからだ。

（俺は死ぬのか？なんで？どうして？俺が一体何をしたんだ？）

頭の中では意味のないことが浮かんでは消えていく。

（ここはどこだ？俺はどうなる？帰れるのか？）

不安になる。なぜ？

（怖い、寂しい、寒い、苦しい）

なぜ？どうして？

誰のせいだ？ 晃だ。あいつが、あいつが俺を巻き込んだからだ。
…あいつは、今、どこにいる？

怒りが高まる。血走った目であいつを探す。いない。

あいつは…運動では勝てなかった。あいつは…勉強でも勝てなかった。
あいつは…恋をしても成就しなかった。

あいつを、コロシタイ

俺の中で何かが音を立てて、壊れた。

「うわあああああああああああああああ！うわああああああ
あああああああつあああああああああ……」

誰もいない森の中、慟哭が響いた

第二話

あれからしばらくして、俺は食糧を求めて歩き出した。あいつを今すぐ探して殺したいが、このままでは飢死してしまう。というわけで食べそうなものを探しているのだが

「何にもないなー」

結構キノコが生えているのだが、あいにく俺にはキノコの知識なんてない。精々素人がキノコに手を出してはいけないということぐらいしか知らないのだ。だからキノコは除外。

次に野草や果物だ。草はたくさん生えている。しかし、俺には全部雑草いしか見えない。いざとなったら食うが、今はやめておこう。

果物はたまに見かける。しかしこれにもまた問題がある。

それは、色だ。派手な色は毒がある、という話を聞いたことがある。どの果物も毒々しい色していてキノコと同じくらい危なそうだ。あとは…デカイ虫がいるが生で食いたくはない。除外。

じゃあ何も食うもんじゃないじゃね？と思うかもしれないが、ひとつだけ食べそうなものがある。そう、クマに食われていたイノシシっぽいやつだ。

道は覚えていないが、所々にクマが吹いた炎の残り火があるのでそれをたどっていけばそのうちたどり着くだろう。

もちろん残り火だけを見ているわけではない。クマに遭わないように、ほかの怪物に遭わないように注意しながら歩いている。

そのため、中々たどり着かないし腹が減った。のども乾いた。

ふと右を見ると金属っぱい何かの塊が見えた。興味がわいたので近くで見てみることにする。…鎧と剣？

どうやら金属っぱい何かは錆びている鎧の一部と刃渡り80センチほどの剣のようだ。所々かけているし、錆びているが丸腰よりましだろう、と思い剣と鞘を拾う鎧の方は重そうなので破棄しておく。

剣を鞘に入れて右手で持つ。

「よし、戻るか」

思わぬ収穫があり少しやる気がわく。心なしか先ほどよりも歩く速度が上がった気がする。

その後適当に落ちていた太い木の枝を燃やして松明もどきを作る。俺がここに飛ばされてからかなりの時間がたっているため暗くなってきたのだ。

松明もどきで足元を照らしながら残り火を辿っていく。

それから一時間ほど歩いてからようやくイノシシを見つけた。

「やっと…見つけた」

俺は急いで木の枝を集めて焚火を用意する。

左手で剣を抜き上から思い切りイノシシに叩きつける。何度か繰り返し、1キロほどイノシシの肉を切り落とす。

「ふうう、こんなもんかな？よし焼くか！」

すでに腹は限界まで減っている。俺は肉を食うために木の枝に肉を刺し炙る。

「腹は減っている。けど何かあるかわからないからな。よく焼かなくては」

しばらく焼いてだいぶ火が通ったようなので焚火から離す。

「よっし、んじやいただきます」

そして俺はイノシシの肉に齧り付く。

「んー、うまい？ような気がするんだけどなんか舌がしびれるような…っ」

気づいた時には遅かった。すでに体には力が入らず倒れる。体が痙攣をおこす。冷や汗が止まらない。目の前が暗くなる。そして

「く…っがここで…ここでし…ッは…死ぬわ…けにはいか…ないの…に」

そこで俺の意識は落ちた。

第三話

「うつ……うあああ……あー」

俺は変な声を出して目を覚ました。

「……あれ？なんで俺は寝ていたんだ？」

俺は起き上がり軽く周りを見る。最初に目に入っただのはイノシシの死体だ。もう肉が腐り始めていて周りには小さな虫やネズミっぽい奴らが我先にと喰らいついている。

足元には木の枝に突き刺さった肉、少し先には焚火がすでに燃え尽きていた。

「そういえば、俺は肉を食ってすぐに倒れて……あれ？……なんで俺は生きているんだ？」

確かに倒れて全身がこれでもかというほど痙攣して意識を失ったはずだ。あれで生きているなんて普通じゃない。

「だけど……生きているよな俺」

そう生きているのだ。

「特に体に異常は……え？」

とりあえず体に異常がないか調べてすぐに声を上げる。制服が汚

れている。だがそんなことはどうでもいい。問題は

「なんだよ、これ……」

体の中にナニかがある。漠然とそれがチカラであるとなんとなく理解する。不可能を可能とすることができるようなそんな力。まるで

「魔法……？」

自分の体の中に意識を向けていると自然とその言葉が出てきた。だが使い方がわからないし何故そんなチカラが体の中にあるのか。疑問は尽きない。

「……望めば使えるのかな？」

（だけど生まれてこの方魔法なんて一度も見たことなんて）

そこまで思ってから昨日のことを思い出す。クマが、炎を吹き出していた。あれは魔法、なのではないだろうか？

口から炎……何度か見たが……自分の口から炎が噴き出る光景をイメージする。口から炎が吹き出ることを強く願う。そして

「っふ！」

息を吹き出すとともに炎、よりも小さい火が吹き出てイノシシの肉にくっ付いていた虫が燃える。虫は焼け死に火はすぐに消えてしまった。

「……うわぁホントにできちゃったよ。」

驚き呆然とするがすぐに異変はやってきた。

グウウウウウー

腹からすごい音がした。そう腹が減ってきた。今までにないくらい強烈な空腹。体の中のチカラもほとんど残っていない。

（何か、食い物は…）

探し、足元に落ちている肉に手を伸ばす。そして泥や汚れなど気にせずに食らいつく。

（うまい）

昨日は微妙な味だったが今日はなぜかうまく感じる。半分ほど食ったが痙攣は起きない。それどころか段々チカラが湧いてきた。

（うまい）

口の周りが油や泥で汚れていくが構わず一心不乱に肉を喰らう。そうして肉を食い終わるが

（足りない）

俺の空腹は満たされなかった。

（もっと、もっと食いたい）

目の前には虫が群がり腐り始めている肉の塊。

俺はふらふらとソレに近づき邪魔な虫を払う。

（邪魔だ）

そう思つて虫を払うと手が燃えて虫どもを焼き殺す。なぜ燃えているのかなんて今はどうでもよかった。

（肉、肉、肉、ニクニクニクニク）

頭の中には目の前のご馳走のことしかない。腐り始めた肉に顔を近づける。腐敗臭が漂う。しかし

（ああああ、ウマソウナニオイダ）

顔を顰めるところか笑顔を浮かべる。そして、俺は、肉に喰らい付いた。肉と一緒に虫を喰うがうまいと感じてしまう。あたりにはクチャクチャと咀嚼する音が響いていた。

第四話

どのくらい時間がたったのだろう。いつの間にか俺の空腹は満たされイノシシの肉はほとんど無くなっていた。チカラの方もかなり増えている。今なら炎ぐらいは出せる気がする。

（だけど出したらまた腹が減るんだろうなー）

確かに魔法は使えた。しかし使うと物凄く腹が減ってしまい正気を失ってしまう。あの時はイノシシの死体があつたからソレに喰らい付いた。魔法を使うなら何か食い物を用意した方がよさそうだ。

俺は口を制服の裾で拭いながらそんなことを思い浮かべつつ剣を拾い、歩き出した。今日の目標は水を探すことと、食糧の確保だ。水は魔法で出せるかもしれないが、そうすると空腹が面倒なので出来れば別々で見つけたい。

（剣が軽い？）

どうやら体の中にチカラが増えただけでなく筋力も上がっているらしい。羽のようにとまではいかないが少し重い木の枝ぐらいに感じる。

「魔法で筋力の底上げとかできるのかなー」

そんなことをつぶやくが試すにはやはり食糧がいる。しかなく俺は剣を片手に森を歩き始めた。

歩き出してから大体一時間と少しくらいたった。ようやく水、デカ

イ湖を見つけた。

「おおお水だあああ！」

腹は満たされていたが血ではのどは潤うことはない。いや、濃厚でうまかったがやはりのどの渴きには水が一番だ。

「よし、さっそく飲むとしますか！」

水を見つけてからテンションが上がってきた。生水は危ない？腐りかけた肉を喰った俺には関係のないことだ。

「んぐ…ん…う…ア” ああああ。うまい！」

ついでに手や顔についた汚れを洗い落す。

「ふう、すっきりしたー」

水を飲み、汚れを落とした俺はここらへんを拠点にすることにした。

「うーん、雨とか風をしのげる家がほしいな…」

遠くの方を見ていると少し先に建物が見えた。水ばかり気にしていたため気づかなかった。

「誰かいるのかな？…とりあえず行ってみるか」

この森に来てから独り言が多くなっている気がするのは気のせいではないのだろう。

建物、いや廃屋にはすぐについた。人の気配はない。

「おじゃましーす」

キィイ、と音を立ててドアを開ける。やはり人はいないようだ。廃屋の中にはテーブルや足の折れた椅子、何もない棚があったがどれもホコリをかぶっていた。ここに住んでいた人はどうしたのだろうか？おそらくだいぶ昔に森で死んでしまったのだとう。

制服は泥だらけだ。今更ホコリ程度で騒いだりはしない。

「よし、ここを俺の拠点にしよう！雨と風がしのげれば問題はないな。」

外で寝るよりはマシだ。そう結論付けてから俺は食糧探しに拠点を後にした。

拠点からあまり離れないようにして俺は食糧を探した。出来れば肉が喰いたい。というわけで俺は喰えそうでかつ俺が勝てそうな獲物を探す。魔法や身体能力が上がっているがそれでもクマはおろかいノシシにすら勝てないだろう。狙うは

「小型の化け物だな。」

俺はアイツを殺すまで死ぬわけにはいかない。俺の人生を滅茶苦茶にしたアイツを殺すためには絶対にチカラが必要だ。だから焦らず確実に力をつけていくしかない。

しばらく歩いていると右の茂みから物音がした。俺はすぐに後ろに跳ぶ。直後角の生えたナニカが目の前を横切った。

（後ろに跳ばなければ危なかったな…）

俺はすぐにそれがなんなのを確認する。体長１メートルほどのウサギのようだ。いや、角があるウサギって…

（ここってやっぱり地球じゃあないのかな…）

そんなことを思いながら俺は剣を抜き、左手で構える。剣道をやっていたわけではない。俺にできるのは適当に振り回すことぐらいだ。それでも、拳よりはマシかもしれない。

ウサギ、ホーンラビットは再び俺に跳びかかってくる。鋭く گرفتった角は刺さったら危険だ。しかし昨日のクマに比べると、劣る。

俺は冷静に見極め突進を右足を引いて体を横にしてよける。すかさず俺は攻撃が空振りし着地したホーンラビット目掛けて剣を振り下ろす。剣は背中当たった。手に斬る、というより骨を砕く感触が伝わる。

ホーンラビットは動かない。どうやら死んだようだ。だが殺したことによる罪悪感とかは感じない。むしろ楽しくそしておいしそうに感じる。

（俺はもう地球に帰れないな…）

地球にいた頃のことを思い出していると涙が出そうになった。あわてて涙を拭いホーンラビットの足を掴む。

あと二、三体は欲しかったが暗くなり始めたので俺は拠点に戻りホ

インラビットを骨と皮を残して食った。イノシシに比べるとかなり味が薄かった。

そしてホコリが積もった床で死んだように眠った。

第五話

翌朝。死んだように眠っていた俺は小鳥のさえずり…ではなく、
ケエエエエ、ケエエエエという怪鳥の奇声で目を覚ました。

「最悪の目覚めだな…」

そう呟いてから体を起こす。フカフカのベッドで寝たいがここには
そんな贅沢なものはない。

「ふうう」

一息ついてから俺は気持ちを切り替えるために外に出て顔を洗いに
行くことにした。

顔を洗った俺はさっそく朝飯を摂るために獲物を探しに行く。ホ
ーンラビットは弱いので狙い目だ。味は薄いが。

カサッ

奴を探していると結構遠くの方から物音が聞こえた。

（どういうことだ？）

俺の耳はそんなによくないのだ。聞こえるはずがない。不思議に
思うが今は朝飯が最優先だ。音がした方に向き剣を構える。

タッ、タッ

どうやら奴はこちらに向かって走っているようだ。

タツ、タツ、ダツ

（いまだ！）

姿は見えなかったが俺は迷うことなく剣を上から思い切り振り下ろす。振り下ろしている剣にホーンラビットは突っ込んでいく。

グチュ、という鈍い音とともにホーンラビットは地面に叩きつけられる。角はへし折れ首は不自然な曲がり方をしていた。

「ふう、朝飯ゲット！」

剣を鞘に納め、廃屋へ戻る。

廃屋の前にホーンラビットを投げる。昨日は生で食ったが今日は焼いて食おうと思う。俺は急いで木の枝を集めて魔法で火をつけようとする。

だが、火をつける前に考える。使える魔法は『火』だけなのか？と。強く願えば叶いそうな気はするのだが、チカラの無駄遣いは避けたい。どうしたものかと考えていると、ある魔法を思いつく。

それは自分、相手のチカラ、魔力の量を視る魔法だ。この魔法が成功すれば『火』以外の魔法が使えることになる。さらに自分の魔力が正確にわかるようになれば魔力の無駄遣いの心配がなくなる。

俺はさっそく魔法のイメージに取り掛かる。魔力量は、ゲームを参考に数値で表示させよう。表示させる場所は、視界の左端だな。

魔法の種類は、無属性のエンチャント系でいいか。あまり機能付け過ぎると魔力消費が心配だ。とりあえずはこんなもんでいいだろう。

俺は目をつむり強く願う。体の中のチカラが抜けていき眼が熱くなる。だがそれも一瞬のことですぐに収まる。

目を開けると…あつた。視界の左端に表示されている。

72 / unknown

やべえ、俺の魔力に限界はないらしい。その割には保有している魔力がたったの72しかない。

ホーンラビットの方はどうなんだ？

12 / 54

少ないな…ん

10 / 54

減っている。どうやら魔力は死ぬと結構な速度で減っていくらしい。

魔力がなくなるとどうなるのだろうか？ 気になるが今は腹が減っているので急いで食うしかない。

魔力がなくなるとどうなるかわからないので結局生で食った。

82 / unknown

（お、10増えている）

どうやら魔力を持った奴を喰うと自分の魔力が増えるらしい。しかし82かぁ。

この魔力で一体どこまで魔法が使えるのか。炎を出すだけで50とか使ウとしたら一体どれだけの獲物を喰えばいいのだろう。

気になるのだが今使うわけにはいかない。使うとしてもすぐに回復できるようにいくつか獲物を確保しておくべきだ。

そう決めた俺は急いで獲物を確保しに森へ走って行った。

ホーンラビットは探せば案外楽に見つかった。狩ったそばからすぐに喰らい魔力を増やす。魔力量は若干個体差があるらしい。54よりも少ないやつもいれば70近いやつがいた。しかし殺すと一気に半分ほど減ってしまうようだ。仕方なく俺は奴らの角を折って弱らせて生け捕りにすることにした。

日が暮れるころにはストック5、食った数は7になった。おかげで魔力は結構増えた。

207 / unknown

7体で125上昇した少ないのか多いのかいまいちわからない。ストックしている奴らは

22 / 49 19 / 44 26 / 54 23 / 49 30 / 67

これだけいれば簡単な魔法二つ、三つぐらいは大丈夫だろう。

とりあえず拠点に戻り集めた木の枝に火をつける。

イメージすれば口から出なくても炎は出るようなので右の手のひらから火球を飛ばすイメージをする。

集めた木の枝に右手を伸ばし集中する。そして火球が右の手のひらから木の枝に向かって飛んでいくことを願う。

ツボオウ

手のひらが熱いと感じたのは一瞬。10センチほどの火球はまっすぐ飛んでいき木の枝に当たり燃えだす。どうやら成功したようだ。魔力が火球に変換され体の中から抜けていく。慣れていないので体の力が抜け膝をついてしまう。

（これは慣れるしかないな…魔力はどのくらい消費した？）

視界の左下を視ると

117 / unknown

どうやらあれだけで90も消費したらしい。

「くっ」

まずい、腹が減った。俺は急いでストックしていたホーンラビットを喰う。

急いですべてのホーンラビットを喰って魔力を回復し、空腹を満たす。

237 / unknown

「ふうー、この空腹感も慣れていかないとまずいな」

でなければろくに魔法を使うことができない。しばらくはこれを繰り返した方がいいのかもしれないな。

最後の魔法を実行すべく俺は剣を抜き地面に置く。刀身は錆びているため焚火の光を全く反射していない。俺はこの剣の錆びや血のりを除去する魔法をイメージする。漠然とか焚火の光を反射する。美しい金属光沢をイメージする。

両方の手のひらを剣に重ね集中する。

(輝く、鋭い刃……)

手のひらからは優しい光が漏れる。光が晴れるとそこには汚れひとつない、焚火の光を反射する美しい剣があった。刃こぼれまでなくなっている。

「あー、『鋭い刃』ってイメージしたからか」

刃こぼれがなくなったのは予想外だったがうまくいったのでよかった。

207 / unknown

（おつ、30しか消費していない。）

思いのほか魔力を消費していないことに喜んだ。

ついでに鞘の方にも除去魔法をかけ新品のようにきれいにする。

177 / unknown

（除去魔法使えるな……）

剣がきれいになったことで上機嫌になった俺は焚火の火を消して眠りにつくことにした。

（明日からは当分の間は、魔力量の上昇と魔法を使うことに慣れるようにしていくか）

新たな目標を胸に俺は目を閉じる。そうして眠りに落ちた。

第六話

あれから一週間ほどたった今日。おれはこれでもか、というほどひたすらにホーンラビットを狩り、食った。もちろん魔法の使用も忘れてはいない。おかげで空腹をあまり感じなくなったし体から力が抜ける感覚にも慣れた。

魔力表示だけでなく、視覚、聴覚、嗅覚の三つの強化魔法をかけた。視覚は視力だけではなく暗くても周りが見える暗視能力を付加した。

ホーンラビットを喰っていてあることに気付いた。それはホーンラビットを喰うことによつて聴力、脚力が微々たるものだが上昇していたことだ。今の俺には20メートルほど離れていても足音が聞こえるようになった。

どうやらあいつ等化け物を喰うと魔力だけではなく体の一部も強化されるらしい。うれしい副産物だ。

ああ、そうそう今の俺の魔力量は

554 / unknown

となっている。

あんまり増えていないが火球を何発か撃っても平気というのは心強い。

現在時刻は不明。たぶん朝。剣の扱いにも慣れてきたしそろそろ森の奥へ行つてホーンラビット以外の化け物を喰つていきたい。

なぜならホーンラビットを喰つても空腹感は満たされるのだが魔力の吸収効率が悪くなってきたからだ。決して吸収できないわけではないのだがあまりにも少ない吸収率が十分の一のまで減ってきた。これ以上ホーンラビットを喰つても魔力の消費>吸収する魔力になつてしまふ。これはいかん。

というわけで今日からは少し遠出をしてホーンラビット以外の奴を狩ることにした。

さすがにクマはまだ早いと思うが、イノシシぐらいならいけそうだし。顔を洗い、除去魔法できれいになった剣を持ち森の奥へ行く。

俺はあたりを警戒しながら歩く。先ほどまではホーンラビットの姿をちらほらと見かけたのだが今ではまったく見ない。そろそろ出てきてもいいのではないのだろうか。

ザッ、ザザッ

（来たか……）

距離は大体12メートルほど、数は…複数いるようだ。ホーンラビットとは違う足音。

俺は剣を構えいつでも反撃できる準備をする。

その間に彼我の距離は6メートルまで縮まっていた。

（来い！！）

俺の思考がわかったのかは知らないが奴らは走ってくる。そしてその姿を現した。

（速い！！）

ホーンラビットと違ってそいつらは速かった。俺は慌てて右方向へ飛び込むように前転してかわす。

すぐに振り向きそいつらを観察する。見た目は狼だ。体長1メートル半、鋭く尖った爪と牙が脅威だ。何より目立つのは毛色だ。少しくすんだ銀色。…シルバーウルフでしょう。

数は三体。さすがにキツイかもしれん。奴らの魔力量は？

1 4 0 / 1 5 0 1 4 7 / 1 5 6 1 4 1 / 1 5 2

……これなら魔法を使っても大丈夫そうだな。俺はすぐに発動できる魔法を思い浮かべる。…身体強化系で脚力強化にしておくか。奴らとの距離を一瞬で縮めることができる…いやそれなら移動強化魔法にした方がいいかもしれん。

願う。 短距離移動魔法…

「縮地！！」

狙うは目の前にいるウルフ。剣を下段に構え魔法を発動させる。

一瞬でウルフの目の前まで移動した俺は下段に構えた剣を切り上げる。

ウルフは躲そうとしたがそれよりも速く切り上げた剣が首を切り落とす。悲鳴を上げることなくウルフは死んだ。

しかし、まだ気を抜いてはいけない。

（あと、二体…）

ウルフたちは仲間が一瞬でやられたからかこちらを警戒して近寄ってこない。

（魔力は？）

499 / unknown

（消費魔力54…また中途半端だな。さてどうしたものか）

俺は剣を右下段に構える。

（属性は炎、効果は爆発）

構えた剣が炎に包まれていく。

願う。 火炎魔法…

危険と理解したのかウルフたちは逃げようとする。

「遅い…飛焰!!」

剣を居合いのように振るう。炎は二つに分裂し逃げ始めたウルフたちに当たり爆発する。

「ふううー、ちよつとやばかったな。魔法がなかったら死んでいた」

349 / unknown

150か…分裂させたからかな？となると一発75になるのか…

俺は音や匂いなんかで他のやつらが来ないようにさつさと死体を喰う。

（ウサギとは違うワイルドな味だ。しかしいつも思うが、塩と胡椒がほしい）

ここに来てからはすべて素材の味なまま食っている。同じ味だと飽きてしまう。

（…魔法で出すか？）

出来ないことはないだろうが、かなりの魔力を使いそうなので却下。

（贅沢は敵だな、うん）

そんなことを考えている間にウルフを喰い終わる。

556 / unknown

ホーンラビットよりはマシかな。喰い終わった俺は、もう用はない

ので急いでその場を離れる。

次の獲物を探していると金属の塊を見つける。

（また剣かな？）

そう思つて近づくとそれは剣ではなく

「盾？」

かなり錆びているが形的には盾のようだ。大きさは60センチほど。除去魔法できれいにすれば使えそうだ。

526 / unknown

「おおー、きれいになった。」

俺は早速盾を右腕に装着する。どのくらい使えるのかはわからないがとりあえずつけてみた。

「無いよりましかな…」

盾を手に入れた俺は獲物探しを再開する。

結局この後に一体のウルフを殺して食ったがそれ以降は見つけられなかったので俺は拠点に戻って一日を終えた。

588 / unknown

第七話

「ふうふう、もう食べねえ」

おれは、本日12体目のシルバーウルフを喰い終わった。

初めてシルバーウルフを喰ってから十日がたった。こいつらは大抵複数で行動しているので稼げる。おかげでかなりの魔力を稼いだ。

1628 / unknown

…今日もたくさん喰ったしそろそろ帰るか。帰ってやりたいこともあるしな。ぐふふ。

危ない笑いを浮かべながら俺は拠点に向かって歩き始める。瞬間、強烈な殺気を感じる。慌てて俺は振り返りあたりを見渡す。

（何かいる）

全く気付けなかった。足音も気配も。殺気を飛ばされてからようやくその存在に気が付いた。いや、気付かせたのか。

（まずい、今までの奴とは全く違う。クマか？）

尋常ではない殺気、存在感。クマではないかと疑う。

俺は唾を飲み込み剣を抜き中段に構える。

（…動体視力強化、発動。 気配察知強化、発動。 脚力強化、発

動)

1338 / unknown

思いつく限りの強化魔法を付加する。動いていないの汗が出る。どうやらかなり緊張しているようだ。

気配察知強化によって敵の位置を把握する。…およそ8メートル。ここまで接近されていたのに気付けないなんて……化け物か? いや、化け物だったな…

俺は忘れていた。こいつらは化け物であることを。油断し過ぎていたな…剣を握る手が震える。

敵はゆっくりとだが確実に近づいている。どうやら不意打ちをする気はないらしい。

…

ドザッ、ザッ

そしてついにその姿を現す。

(デカイ…)

見た目は狼だ。だが大きさが異常だ。体長5メートルはある。シルバーウルフに似ているが、比べ物にならない。なんだこいつは。正直今すぐに逃げ出したいが、逃げ切る自信がない。

シルバーウルフのようなくすんだ銀色ではなく白銀。一切の汚れ

はない。シルバーではなくプラチナとでもいうべきか。プラチナウルフの後ろにはシルバーウルフが十体もいる。

（どうやらプラチナウルフはシルバーウルフを率いている長のようだ…）

同胞を殺されまくって怒っているようだ。

しかし、見れば見るほど大きい。爪も牙もかすっただけでも危ない。シルバーウルフは戦いに参加しないのか、近づいて来ない。

プラチナウルフとの距離は三メートル。油断をしてはいけない…魔法で強化しているが勝てるかわからない。

動かない。奴は俺を睨むだけで動かない。段々不安になってくる。

（くそッ、やるしかないか…縮地！）

俺は縮地を発動し、奴の左側面に移動し剣を右から左へ薙ぐ。しかし

（グワァ、かてえ、なんだよこいつ！）

剣は白銀の毛を少し斬ることしかできなかった。弾かれ無防備になっている俺目掛けて奴は左前脚を振るう。

（やべえ、縮地！）

ブオオン

縮地でなんとか躲すが、まずい。ますます勝てる気がしなくなってきた。

奴は俺の方を向く、次の瞬間奴の姿が消える。

「なっ！ぐわあああ」

驚く暇もなく奴の突進をくらって俺は吹き飛び背中から木に当たる。

（ウソだろ、動体視力も強化したのに…）

痛むが動けないほどではない。どうやら俺を弄り殺すようだ。だが俺も素直に殺されるわけにはいかない。

剣を上段に構える。

（飛焰・双牙！）

剣を振り下ろしすかさず振り上げる。太刀筋に沿って炎は飛ぶ。

当たることを確認せずかさず縮地で移動し、願う

（属性は雷。形状は槍。速さを…願う）

右手に一メートルほどの雷の槍が出現する。

「あたれえええ」

雷槍を奴に向かって投げる。

奴は飛焰を横に躲そうとするが側面から雷槍が来ているため横に躲せない。一瞬奴の動きが止まる。だが一瞬あれば十分だった。飛焰より先に雷槍が突き刺さる。

グ
ウ
”
ウ
オ
オ
オ
オ
ン

雷槍で怯んでいる隙に飛焰・双牙が炸裂する。爆発音が二回。これで死ぬとは思わない。俺はさらに願う。

（属性は雷。 剣に付加。 切れ味を強化。 鋭さを…願う）

「雷劍！」

剣が青白い雷が纏われる。

「縮地！」

飛焰でさらに怯んでいる奴に接近し剣を上段に構える。

（属性は雷。剣に付加。威力を…願う）

雷劍にさらに魔法を付加する。

「雷劍・剛！」

踏み込み思い切り剣を振り下ろす。

「くらええええええ！」

刀身が奴の軀を斬っていく。バチチチチチチという音が響きと雷光

が迸る。

「うおおおおあああ」

そして、完全に振り下ろし切る。周辺は焦げている。

そして奴は倒れる。なんとか勝った。全身の力が抜け倒れそうになる。俺は剣を地面に突き立ててなんとか耐える。長が殺され騒いでいるシルバーウルフどもは睨んだだけで逃げて行った。

「ッはあ、はあ、ッはあ、っや、やった。勝った」

強かった。なんとか勝てたが、できれば二度と戦いたくない奴だ。

勝ったはいいが、かなり魔力を消費してしまった。途中からは消費量無視していた。

633 / unknown

「うわあ、半分ぐらい使っちゃったよ。こいつを喰えば何とかなるか」

2371 / 4835

俺は疲れていたが空腹で正気を失う前に腹を満たすことにした。

……喰い終わった後は即行で拠点に帰り久々に死んだように眠りを貪った。

3004 / unknown

第八話

プラチナウルフを倒した翌日。聞きなれてきた怪鳥の奇声ではなく、ザアアアッと降る雨の音で目を覚ました。この森に飛ばされてから初めて雨だ。…ここはいまいつの季節なのだろう？

そこまで暑くはない。むしろ過ごしやすいくらいだ。春ぐらいなのかもしれない。

そういえばこの森に飛ばされてからもう一か月は経つのではないのだろうか。今日は少し今までのこと、これからのことを考えてみるのもいいか。

考えないようにしていたがここ、この世界は地球ではないだろう。地球ではない、おそらく異世界ということになるのだろう。15年間生きてきたが少なくとも魔法が使える人なんて見たことはない。それに角の生えたウサギや5メートルもある狼、火を噴くクマなんて聞いたことも見たこともない。

どう考えてもおかしい。

ここに飛ばされてから大分経つ。家族はどうしているのだろうか？いきなり失踪したのだ、もう警察に届けが出ているだろう。だけど見つけることは不可能だ。異世界にいるのだから。

当然帰りたいと思う。家族に会いたい。友人と話したいことだった。高校生活だってまだまだこれらというところだった。恋だって…したかった。

けどもう無理だ。俺は地球に帰ることは、できない。ただ帰るだけなら十分な魔力を蓄えて願えばいいのだ。だがおそらく一生をかけてもそんな魔力は集まらないだろう。

だが一番の問題はそんなことではない。化け物とはいえ俺は殺しなれてしまった。もう殺戮衝動や破壊衝動が抑えられない。

学校で町で、腹が減れば殺し喰らう。おそらくそうになってしまうだろう。それに魔法もある。隠し通せるとは思えない。長い間失踪していた俺が戻れば当然何があったのを聞かれるだろう。

しかし正直に異世界の森で狩って暮らしていたと聞いて誰が信じる？誰も信じない。それどころか頭がおかしくなったと思われるだけだ。そんなのは嫌だ。…戻ってもそこに俺の居場所はない。

もう俺はここで生きていくしか道はない。

どうしてこうなった？自分の中で何度も問うた。そのたびにこう思う。あいつのせいだ。あいつ、神崎晃のせいだ、と。だがなぜ晃は飛ばされたのだ？偶然なのか、意図的に飛ばされたのか。だとしたら誰に？なぜ？偶然ではなく誰かがやったのならそいつも容赦はしない。

…待て、誰かが呼び出す…召喚したなら、なぜ俺はこんなところにいるのだろう？術者のところに召喚されるのではないのだろうか。

…いや、俺は巻き込まれただけだ。座標が狂ってもおかしくはない。

それに召喚なんてものが個人で簡単にできるとは思わない。国単位とかでやっているのではないのだろうか？…だめだ、森の中にいては何もわからない。森から出た方がいいのだろうか。

いや、晃もこの世界に来ているはずだ。当然魔法が使えるようになったっている筈だ。あいつのことだ、俺よりもうまく使えるに違いない。あいつを殺すためにはあいつよりも強くななくてはならない。国ごとつぶすのならなおさら力がある。圧倒的な、力が。

どうすれば強くなれるのか？決まっている。強いやつを喰って喰ってひたすら喰らうしかない。そうして力を蓄えていくしかない。負ける訳にはいかない。俺の人生を滅茶苦茶にした奴らを殺すまでは死ねない。必ず、殺す。

…少し熱くなりすぎたな。食糧確保のついでに雨に当たって頭を冷やすとするか。

俺は立ち上がり、狩に出かけた。

雨が降る中、俺は立ち尽くしている。すでに食事は終えた。では俺が今、何をしているかというと、魔力を失うとどうなってしまうのかを確かめている。雨でぬかるんだ地面には一体のホーンラビッツが死んでいる。こいつの魔力がなくなったときどうなってしまうのか。

3 / 3 4

あと少しで0になる。さてどうなることやら。大体の予想はついている。しかしできれば外れてほしい。でなければ俺はもう…いや、まだだ。まだわからない。まだ…

……おかしいな、俺は笑っているのになんで、なんで

なんで、俺は、泣いているんだ？

雨が強くなってきた。俺の笑い声は降り続ける雨によってかき消されていった。

第九話

あれから数日がたった。俺は寝る間も惜しんでひたすら狩り、喰らい続けている。夜でも関係ない。暗視魔法を付加しているため。暗くても問題なく活動できる。疲れを感じたら魔法で疲れをとった。傷を負った時も魔法で癒した。

今も狩りの最中だ。シルバーウルフが5体。

二体が左右から飛びかかってくる。後ろからも一体襲ってきている。

俺は左手の剣を下から上に切り上げる。右手には炎の剣『炎剣』を発動し軽く横に振るう。剣からは太刀筋をなぞるように飛焰が飛んでいき焼き尽くす。炎剣はウルフの頭に当たり、頭を吹き飛ばす。返り血が体にかかる。

二体のウルフを殺し、縮地を発動する。後ろから飛びかかっていたウルフは一瞬で標的を探す。しかし首を曲げようとするが、曲がない。そのまま視界が暗くなり絶命する。首を切り落とされたが最期まで気づかなかった。

残った二体は背を向けて逃げようとしていた。

「逃がさん……」

俺は縮地で距離を詰め一体に狙いを定めて蹴りを放つ。蹴られたウルフは短い悲鳴を上げて飛んでいき木に衝突しそのまま動かなくなった。

最後の一体は逃げ出している。剣を右下段から逆袈裟に切り上げる。

「…地走り」

刀身からはいくつもの鎌鼬が飛びウルフを切り刻む。血が飛び散る。何も感じない。血糊を払い剣をしまう。殺して、喰らう。その作業をひたすら続ける。強くなるために。三体目を喰らい終わり四体目を喰らおうとしたとき、デカイ存在を察知する。

（プラチナウルフか…）

ウルフを蹴り飛ばし剣を構える。

「ゲウオオツオオオオオ」

吼えながら高速で飛びかかってくる。俺は縮地で回避し距離を離す。

（狭いな…）

躰の大きいプラチナウルフを相手にするには場所が悪い。俺は背を向けて、縮地で移動する。奴もすぐにあとを追いかけてくる。やはり速い。縮地と同じか少し速い速度で追いかけてくる。

（ツち！）

追いつかれ、振るわれた前脚が当たり吹き飛ばされる。

地面に何度か叩きつけられようやく止まる。

（…っ！右腕が…）

尖った爪が当たり、右の二の腕に傷を負う。魔法で癒しつつ立ち上がる。

（しばらくは動かないな…）

右腕をだらんと下げたまま視線で狙いを定めて願う。

（属性は炎。効果は爆発。破壊を、願う）

プラチナウルフは手負いの俺にとどめを刺すべく飛びかかってくる。瞬間、横から爆発がおこる。横に吹き飛ぶプラチナウルフに俺はすかさず願う。

（属性は炎。形状は球。数は三。効果は爆発。破壊を、願う）

瞬時に発動し一メートルほどの大きさの火球が出現する。

「死ね」

つぶやくとともに火球はプラチナウルフ目掛け飛んでいく。着弾し、地面が大きく三回連続して揺れる。炎が収まるとそこには爆発で肉が所々飛び散った焼死体が現れる。焦げ臭いが漂ってくる。おいしそうな臭いだ。俺は剣を仕舞い焦げた肉に喰らい付く。右腕の治癒はもう少しかかりそうだ。

プラチナウルフを喰い終わった後も俺は狩り続けた。いつの間にか傷の治癒は終わっていた。

……だいぶ森の奥の方まで来てしまったらしい。ウルフどもを全く

見なくなった。…少し戻るか。獲物がいないのならば活動していても意味はない。時間を無駄にするわけにはいかないのだ。

俺は戻って獲物を探しに行こうとした。そのとき、

(ッ！！なんだ？やたらと大きい気配がする…)

俺の索敵範囲にデカイ何かが引つ掛かった。…プラチナウルフではない。もう二回遭遇して戦ったのだ。気配が違う。こいつは…！！俺が硬直している間にそいつはノソノソと姿を現した。

俺は剣を抜き右下段に構え、そいつを睨む。初めて見た時よりも大きくなっている。いや別の個体なのだろうか？体長は四メートルはほど。赤黒い剛毛。鋭く長い尖爪。鉄すらをもやすやすと噛み千切りそうな鋭牙。牙をむき出しにしてこちらを睨んでいる。口からは涎が糸を引きながら垂れる。その眼には明らかな殺意がのぞく。

俺は唾を飲み込み剣を強く握る。…手から汗が滲んでくる。緊張している。だがこいつには負けられない。この森の長と思われるこいつ、ブレイズベアーには。

第十話（前書き）

すみません遅くなりました。そして短いです。
次の更新は31日までにはしたいと思います。

第十話

ブレイズベアーの姿を確認した俺はすぐに行動を開始した。雷剣を剣に纏わせている間に右手に雷槍を構えブレイズベアー目掛けて右腕を振るう。

ダメージは期待していない。縮地で接近するための時間さえ稼げればいい。

雷槍はブレイズベアー目掛けて一直線に突き進む。ブレイズベアーは太い腕を横に振るい、雷槍をかき消した。

雷槍に意識が向いている間に俺は縮地を発動させてブレイズベアーに近づき、剣を上段に構えて無防備な腹目掛けて振り下ろす。肉を切り裂く感触が手に伝わり、雷で肉が焦げた臭いが漂う。

俺は繰り下ろした剣を続けて斬り上げる。

ブレイズベアーは腹を斬られたがすぐに右腕を構えて切り上げられる剣を弾く。

剣を弾かれ硬直している俺は向ってブレイズベアーは左腕を振るう。

（ヤバイ！！）

距離を取ろうと縮地を発動させたが遅かった。右からトラックにでも衝突されたかのような衝撃が襲い、勢いよく飛ばされる。

「ぐはっ……」

吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。視界がぐらつき、口の中は血の味が広がる。右腕は何か所折れているのかわからないぐらい

グチャグチャになっている。瞬時に硬化をかけたおかげかとりあえず右腕はくっ付いている。

右腕を重点的に治癒魔法をかける。

ブレイズベアーは当然怪我の治癒を待ってくれない。俺の方を向き、両腕を振るう。その指先から無数の火球を打ち出す。

俺は心の中で舌打ちを一つして痛む身体に鞭を打って立ち上がり駆け出す。痛みで治癒魔法以外にの魔法を使うほどの集中力を出せない。それでも必死にブレイズベアーを中心に円を描くように走り火球を躲す。

火球を躲しても地面や木に当たり爆発し爆風が発生する。何度か爆風で足を取られそうになったが何とかして持ちこたえた。躲しきれない火球は雷剣を消し、飛焰で相殺した。

しばらくしてようやく治癒が完了する。痛みは少し残るが仕方がない。俺は駆けていた足を止めブレイズベアーに向かって走る。

ブレイズベアーは後ろに大きく仰け反り、膨らんだのどから叫びのような声とともに紅炎が口から溢れ出した。紅炎の津波はブレイズベアーに向かって走る俺に迫ってくる。

俺は剣を切り上げ地走りを発動させ紅炎の津波を切り裂く。津波を抜けたが目の前には無数の火球が迫っていた。俺は心の中で願った。

（瞬間移動！！）

願った瞬間俺はブレイズベアー後方10メートルほどの所に立っていた。生きていることに喜びを覚える前に俺は激しい空腹を感じ

た。

（あれ？おなかすいた…）

視界の左下を見る。

1293 / unknown

瞬間移動を使って一気に魔力を消費してしまったようだ。イメージがしっかりしていなかったからなのか、もともと瞬間移動は大量の魔力を消費するものなのか。考えるがすぐにどうでもよくなった。

オナカガスイタ

コロシタイ

クライタイ

コワシタイ

俺は暴れまわるは本能に抵抗することを放棄し身をゆだねた。

第十一話

暴れまわる欲望に身を委ねると体が軽くなったように感じた。同時に食欲だけではなく破壊揺動や殺戮衝動が火山の噴火のように勢いよくあふれてくる。

サア、ハジメヨウ

全身から黒い霧が滲み出てくる。特に右腕には多くの霧が集まり包み込む。次第に霧の密度が高まり実体化する。肌色から漆黒の染まり太く地面に掠るぐらい長くなり五本の指の先は鉤爪のように鋭く変化する。

（グッ…）

右目が痛む。流れ落ちる液体をなめると血の味がした。鏡を見れば右目が赤く変色していることに気付いていただろう。

痛みに不快感を感じたが今重要なのは目の前の獲物を切り裂き、砕き、引きちぎり、喰らい、血を啜ることだ。

俺を危険と判断したのか、ブレイズベアーは腕を振るい無数の火球を飛ばす。同時に俺は駆けだす。迫りくる火球を速度を緩めることなく躲しながら巨大な右腕を振るい黒い火球を飛ばす。何発か当たりブレイズベアーを黒煙が覆う。

さらに接近すると紅炎に包まれた腕が黒煙を突き破って横なぎに襲う。即座に屈んで躲し、通過した腕を切り裂く。肉を切り裂く感触がダイレクトに伝わり気持ちがいい。濃厚な血の匂いが食欲をそ

そる。

痛みで暴れるブレイズベアーから一度距離をとる。黒い火球によって右目は焼かれ、左腕は肉がこっそりと吹き飛ばされ骨が露出している。

命の危機を感じたブレイズベアーは背を向け逃走を始める。

ニガサナイ

剣を握る左腕から黒い触手が伸びブレイズベアーに絡みつく。触手を収縮し徐々にブレイズベアーが引きずられてくる。暴れるが触手は千切れる気配がしない。頑丈なようだ。

徐々に近づく中、俺の右腕の霧は形を変える。右腕にさらに霧が集まり実体化していく。先ほどの腕よりも長く大きい龍の顎。黒い牙は長くどれも鋭い。雛鳥が親鳥から餌を貰うかのように巨大な口を開き獲物を待つ。微笑ましさのど欠片もなく、見るものすべてに恐怖を与える光景だ。

ブレイズベアーはさらに暴れるがもう龍の顎の目の前だ。大きく開かれた口はゆっくりと閉じブレイズベアーの頭を噛み千切る。ブレイズベアーの抵抗は止み触手を解く。

「ウオオオオオオオオオオオ」

俺は勝利の雄叫びをあげる。右腕の龍も解き俺は一心不乱にベレイズベアーの死骸に喰らい付いた。

腹も魔力も満たされた俺は地面に横たわり体を丸める。満腹にな

り睡魔が襲うが抗うことなく眠り始めた。

「…さ……なよ」

声が聞こえる。身体が揺れている。地震ではなく声の主に揺られているようだ。

「はや……起き……ば」

どこかで聞いた声。懐かしく感じる。一体誰の声だ？

「早く起きろって言ってるでしょうが……！」

拳が振り下ろされ俺の腹にめり込む。

「グファッ」

痛みで完全に目が覚める。そして自分がベッドで寝ていることに気が付く。

「あれ、ここはどこだ？さっきまで異世界の森にいたはずなのに……」

目の前に映るのは広く薄暗い森ではなく狭い自分の部屋。

「兄さん何言ってるの？いつまでも夢見てないでさっさと支度しなよ。今日学校だよ」

そう言つて俺の妹である佐藤咲美は部屋を出て行つた。

「…学校？」

そう呟いて俺は充電器が刺さつた携帯を開き日付を確認する。…確かに平日だ。

「戻つてきたのか？」

呆然とするがここは自分の部屋で、さっきのは咲美だ。

「いや、ここが現実だ。異世界の森とかなんだよ。夢だ、夢に違いない」

やけにリアルな夢だったな、と笑いながら起き上がり制服に着替えしていく。

（そうだ、今日このことを晃に話してみるか）

晃

その名前を思い浮かべるとちくりと胸が痛んだ。

（あれ、何かを忘れているような気がするけど…）

首をかしげながら、まあいいか、とつぶやいて着替えを再開する。

制服に着替え両親に挨拶をし朝食を食べる。???は部活の朝練でもう学校に行っているようだ。

朝食を食べ終えた後、歯を磨き、鞆に教科書やノートを詰め込んで準備をする。

「行つてきます」

靴を履いて玄関のドアを開ける。

通学路を歩いていると後ろから声をかけられた。

「おはよ、和馬」

挨拶を返そうと晃の顔を見た瞬間、視界が真っ赤に染まり俺の両手は晃の首を絞めていた。

晃は苦悶の表情を浮かべ、苦しさに喘いでいる。

（そうだ、俺は晃を殺す。なにが「おはよう」だ。気安く俺に話しかけるな。お前は俺の復讐対象なんだよ。お前は、俺の…）

晃は酸素を求めて口を大きく開ける。涙を鼻水を唾液を垂れ流しにして弱弱しく首を絞める俺の手を掴む。

（ハハ、簡単だ。こんなにも簡単に殺せる。さあ、早く死ねよ。死んでくれ）

俺の手を掴む力が弱くなっていく。もう少しだ。

（俺の人生を壊したんだ。今度は俺がお前の人生を壊してやる）

掴んでいた手が離れる。絞めていた手を放すと晃は鈍い音を立てて

倒れる。

(終わった…案外あつけなかつたな…)

「やった、はは、殺した。俺が、この手で梟を殺した」

うれしさがこみあげてくる。

「あはっ、あッはははははははははは！」

晃はピクリとも動かない。

寒い。俺は寒さを感じて目を覚ます。どうやら本能に任せてブレイズベアーを喰った後すぐに寝てしまったようだ。

「夢か……」

周りには森が広がっている。自分の部屋ではないし、晃の死体もない。

「はああ」

俺はため息をついて立ち上がる。

（ブレイズベアーも倒したしこの森で一番強いのは俺になるのか？）

そんなことを思いながら森の奥に進む。しかしすぐに現実というものを思い知ることになった。

（な、んだよこれ…は…！）

殺気。今まで受けてきた殺気が可愛く思えるほどの強さ。

（次元が違いすぎる）

ブレイズベアーが森の主？俺が一番強い？

（馬鹿か俺は…）

今いるところは森の奥ではない。ここが入口だ。

（あれを…）

拳を握り俺は決心する。

（あれを倒す）

この森の本当の主を倒せば、どんな敵が現れても対処できる。国と戦っても勝てるくらいの強さがなくては復讐を達成できない。

（必ず殺す。待っている…）

俺は森の主を殺すために強くならなければならない。俺は湖に戻る。ことなく森の奥に進んでいった。

第十二話（前書き）

しばらく和馬君はお休みです。今回からは晃君ルートに入ります。

第十二話

「…ここはどこだ？」

僕、神崎晃は冷たい大理石のような石の床に座りながらつぶやいた。さつきまで和馬と下校していたはず…そうだ家まであと少しの所でよくわからない裂け目に吸い込まれたんだ。

キョロキョロとあたりを見渡し親友の姿を探すがそこにいるのは親友ではなく白いローブのようなものを着た人たちや重そうな鎧を全身に身に纏う騎士たち。正直まともな人には見えない。

「ようこそいらつしゃいました、勇者様」

そう言いながら僕の目の前に彼女はやってきた。純白のローブを身に纏い、肌の色は雪のように白く、淡く輝く金色の髪は腰に届くくらい長い。年齢は16ぐらいかな。背丈は下から見上げた感じでは大体160センチくらい。うん、簡単にいうと美少女。

一体誰が和馬だろう？

和馬は美少女ではないし、ローブも全身に鎧を着たりもしない。

和馬も重要だが、それよりも

「…勇者？ええと、誰がですか？」

とりあえず僕は、立ち上がりながら、彼女の目を見ながら質問する。

彼女は頬を朱に染めながら答えてくれた。

「あ、えっと…あなたのことです、勇者様」

どうやら僕のことだったらしい。…予想はしていたが。

「勇者様…ね。僕の名前は神崎晃。できれば名前で呼んでほしいな、えっと…」

すかさず彼女は

「申し遅れました。私はファルム国の王女、シルファ・ファルムです」

ファルム国？聞いたことはないな…。シルファ…見た目も名前も日本人ではないようだ。僕は深呼吸をして再び質問をする。

「シルファさん、ここはどこですか？」

「ここは『召喚の神殿』です。私が勇…晃様を召喚したのです」

ファルム国ってどこ？って聞いた方がよかつたかな？それにしても『召喚の神殿』？僕を召喚…シルファが？

「僕を召喚したのはどうしてなのシルファさん？」

優しく問うとシルファさんは真面目な声で答えた。

「晃様を召喚した理由は、魔王を倒していただきこの国を、世界を救ってもらうためです」

僕はしばらく呆然としてしまった。

（魔王…倒す、僕が？）

呆然しているとシルファさんは慌てて付け足した。

「も、もちろん晃様一人ではございません。私やこの国一強い騎士も一緒です。…それに」

「それに？」

「召喚したのは晃様一人ではございません。もう一人、私は召喚しました」

それを聞いた僕はすぐに和馬のことを思い浮かべ

「あのシルファさん、それって…」

言いかけた僕はシルファさんが、周りの人たちが僕を見ていないことに気付いた。

（一体何が…）

僕はシルファさんの見ている方を見た。そこには青白く輝く複雑な文字や図形が描かれた魔法陣が出現していた。

「す、すごい…」

僕は青白く輝く魔法陣を見て驚く。

（綺麗だ…）

魔法陣の輝きはどんどん強くなっていき、視界が真っ白に染まっていく。

強い輝きの中、シルファさんの声が響いた。

「私が召喚したのは勇者様ともう一人」

輝きが次第に弱まっていく。輝きが治まりそこにいた人物を見て僕は驚く。

「…聖女様です」

そこにいたのは

「あ…れ？ここは、どこ？」

和馬ではなく妹の咲美ちゃんだった。

第十三話

兄さんと晃さんがいなくなつて一カ月が経つた。二人が失踪してすぐに神崎家と佐藤家は警察に届けを出した。しかし得られたのは一つの証言。

『空間に裂け目ができて吸い込まれた』

訳が分からなかった。空間に裂け目？証言が出たと聞いて、伺つてみればそんな証言ともいえない妄言だった。一月経つたが二人は見つからなかった。

「兄さん…」

私の兄、和馬のことを思い浮かべる。今、どこで、何をしているのだろう。危険な目に遭つていないか。食事は摂れているのか。…生きているのか。

兄さんと晃さんは小さいころから仲が良かった。家が近所で小さいころは私を含め三人でよく遊んでいた。

兄さん達が小学校、中学校に入ってから兄さんは晃さんと比べられていた。勉強も運動も人徳も…何もかもを色んな人から比べられ悔しがって隠れて努力していたことを私は知っている。それでもその差は縮まることはなかった。それでも兄さんはあきらめることはしなかった。

高校に入学してから比べられていたようです。

兄さん達が失踪したことはすぐに広まっていきました。しかし晃さんの心配はしても兄さんの心配をしてくれる人はあまりいませんでした。なかには兄さんのせいにする人たちもいました。

「兄さん…」

無意識につぶやく。最近はいつもこうだ。

一体どうしてこんなことになったのでしょうか？兄さんは何も悪いことはしていません。努力を欠かさず、私が困っている時はいつも助けてくれる優しい兄でした。

「はぁ…」

私はため息をついて立ち上がります。沈んだ気持ちを紛らわすために散歩でもしてこようと決めた私は玄関に向かう。元氣のない両親に散歩に行くことを伝え、外に出た私は適当に歩き出す。

「兄さん…」

また無意識に呟いたそのとき私の腕が後ろに強く引かれた。

「！！」

後ろを振り向くとそこには空間の裂け目のようなものがあつた。

（空間の裂け目）

一つだけ出た証言。

（もしかして兄さん達はこれに…？）

私は抵抗しながら考える。このまま引きずり込まれれば兄さんに会えるのではないのか、と。

私は力を抜き抗うことをやめた。目を瞑り、呟く。

「兄さん…」

裂け目は私を吸い込むと何事もなかったかのように消えた。

人の気配を感じ目を開けるとそこには、晃さんが立っていた。

聖女として召喚されたのは和馬の妹の咲美ちゃんだった。僕と目が合い近づいてくる。

「あの、晃さんですよ？ここはどこなんですか？」

「僕もついさっきここに来ただけだから詳しくはわからない。…ここはファルムという国で、僕たちはこの国の王女様の…」

僕は言いながらシルファさんを見る。

「彼女、シルファさんに僕は勇者として、咲美ちゃんは聖女として召喚されたらしい」

「晃さんが勇者で私が聖女…？一体どういうことですか？」

咲美ちゃんが聞いてくるが、ここでシルファが割り込んできた。

「ようこそいらっしやいました、聖女様。私はファルム国の王女、シルファ・ファルムです」

シルファさんに挨拶をされ、咲美ちゃんは慌てて返す。

「あ、えつと佐藤咲美です。あ、あの聖女って何のことですか？」

「詳しい話はまた明日にしましょう、咲美様。お部屋を用意いたしますのでついてきてください」

シルファさんは咲美ちゃんの質問には答えず『召喚の間』を出ていく。

僕と咲美ちゃんは慌ててついて行った。

部屋に案内僕と咲美ちゃんは一目見ただけで高いとわかる椅子に向かい合うように座った。案内をしてくれたシルファさんはすでに部屋にはいない。明日、詳しい話をするらしい。

座って一息ついてから咲美ちゃんは口を開いた。

「あの、晃さん。兄さんはどこにいるのですか？」

「僕にもわからないんだ。今日僕が召喚されたときはいなかったんだ」

それを聞くと咲美ちゃんは首をかしげた。

「今日？一カ月前ではないんですか？」

「一カ月前？どういうこと？」

咲美ちゃんは一か月前に僕と和馬が失踪したという話をした。召喚には時間差があるのかもしれない。

「となると、和馬はまだここに来ていないだけなのか？」

「…晃さん。兄さんは無事ですよね…？」

咲美ちゃんは泣きそうになりながら呟く。きつと一か月前からずっと和馬のことを心配していたのだろう。

「大丈夫だよ咲美ちゃん。和馬はきつと無事さ」

そう、あいつはきっと生きている。和馬は僕の親友なのだ。死ぬはずない。

そうだと和馬？

第十四話

森の奥に進んでからたぶん一週間がたった。：もしかしたら二週間かもしれない。まあ細かいことは気にしないおこ。森の奥の化け物どもは予想以上に強く、エンカウント率も比べ物にならないくらいに高くなっていた。

来ていた制服はボロボロで正直服としての機能を保っていない。赤く染まった右目はもとに戻ることもなく黒い霧も常に薄く纏った状態だ。

そんな中、俺は喜んでいいのかよくわからない状況に陥っている。

「人間に化けても無駄よ！『エルフ』である私は気配でわかるんだから！」

足を怪我したエルフの少女は木を支えに立ちながらギャンギャン喚いている。

「おいおい、んなデカイ声出すなよ。気づかれるだろ……」

静かにするように注意するが全く聞く耳を持たない。

（どうしよう…）

初の異世界の住民遭遇なのだが、どうしよう。うるさいし殺してしまおうか。いやいやちょっと待とうか俺。相手はまだ子供だ、殺しちゃいかんだろ？

頭の中でくだらない茶番を繰り広げながらエルフの少女を観察する。

見た感じ小学生高学年ぐらいだから…十二歳くらいか？顔のパーツはこれどもかというほど整っている。肩甲骨ぐらいまである色素の薄い髪と白い肌。小柄でちんまりした背丈。掴んだだけで折れてしまいそうな細い手足。将来はきつと美人になるな。

観察していたら俺の中の欲望が膨らむ。ふらふらとエルフの少女に近づき俺は欲望に身を任せる。

…なんてことはしない。するはずがない。そもそも美味しそうに見える。…変な意味ではなく、食欲があまりわかない。少女の魔力量を見る。

3 4 4 0 1 / 3 5 7 1 2

魔力量だけなら半端なく高いのだが何故だか喰いたいと思わないのだ。

まあ、いいや。思考を放棄し少女を拠点まで連れて行き話を聞こうと俺は少女に近づく。

「く、来るなあ！」

「そんなにおびえるなよ、俺が変態みたいじゃないか」

俺はロリコンじゃない。年上が好みなんだ。

少女の腕を軽く、本当に軽く掴んだ。少女の抵抗は激しさを増す。

「放せ！放してよお！」

「暴れるな、別に殺したりはしな…」

少女の掴まれていない自由な方の手が俺の頬を打つ。

「！―やつ、ごめん…」

俺は掴んでいた手を放し、頭を掴み地面に叩きつける。…どうやら鼻が折れたようだ。そのまま少女を持ち上げる。顔は涙と泥と血で汚れ、泣きながら許しを請う。

「ごめんばい…ひつ、うぐ…」

掴んでいた手を放し地面に落とし蹴り上げる。少女は悲鳴を上げる暇もなく飛び再び地面に叩きつけられる。

…死んではいないが、気絶したようだ。

「やつちやつたなあ…」

こんなことをするつもりはなかったのだが、ついカッとなってしまった。

「…静かになつたし別にいいか」

ぐつたりと地面に横たわる少女を抱えて拠点に向かって歩き出した。

拠点まで戻った俺は少女を降ろし、傷を癒すし浄化をかけてやる。自分にも浄化をかけていると、少女は目を覚ました。

俺の姿を見た途端壁まで後ずさり、ガタガタと震え、涙目でこっちを見る。

「…そんなにおびえるな。おとなしく俺の言うことを聞いていれば危害は加えないから。な？」

最上級のスマイルで俺は言うが少女の震えは収まらない。

「お前、名前は？」

少女は震えている！！

「…答えないと殺すぞ」

面倒になり素に戻る。

「ティ…ア」

小さい声でティアと名乗った。円滑なコミュニケーションのために俺も名乗る。

「俺は和馬だ。よろしくなティア」

なんというか先は長そうだ。

第十五話

翌日。

煌びやかな大広間、着飾った男女が左右にずらりと並んでいる。
シルファさんは上座の方に立っている。

そして正面には宝石やら金銀が詰め込まれた派手な椅子に座っているのはおそらく国王と王妃。

その背後には武装した赤い髪的女騎士。護衛かな？

僕と咲美ちゃんは膝をつき、頭を下げている。

「そなたたちが、勇者と聖女か」

国王の重く体中に響く声が大広間に広がる。

「はい。国王様」

国王様は僕と咲美ちゃんを見て満足げに頷く。

「そなたたちには三年後に現れる魔王を打ち倒してもらいたい」

「魔王…ですか」

「うむ。魔王を倒すことができるのは根源属性が光、それも強力な

光属性でなければならん。…召喚は無作為に選ばれるものではない。強力な光属性を秘める者を勇者として、モンスターの魂を浄化することが出来る者を聖者・聖女として召喚するのだ」

魔王を倒す力。それが本当にあるのかは自分ではよくわからないが、それでも僕を必要とする。僕の協力でこの世界の人々が救えるのなら僕は、

「僕、神崎晃は魔王討伐を引き受けます！！」

困っている人がいるのなら僕はできることをするまでだ。

「私も、佐藤咲美も引き受けます！！」

こうして僕たちは魔王を討伐することになった。

最近森の中が寒くなってきた。俺は黒い霧を丸くしたり、四角くしながら森の奥を歩いている。形を変えているのは特に意味はない。あれからティアと何度か話をしたのだが中々警戒心を解いてくれないので最近「危害を与えません」アピールをしながら暮らしている。…いまだに向こうから朝の挨拶が来ないがきつとそのうち心を開いてくれる。

ティアのことを考えているとモンスターが近づいてきた。

出てきたのは体長一メートル半の猿だ。特徴は腕が異常に長い。地面にくっつくぐらい長く厄介だ。数は三体。

一体が真正面から飛び込んでくる。霧を右腕に纏わせ龍化させ、頭に噛り付く。そのまま食い干切るとドスッと音おたてて頭のない死体が落ちた。

霧が薄くなった左側から長い腕を振るわれる。右に躲そうとするが爪に魔力が集中しているのを確認すると俺は思い切りジャンプした。俺のいた場所を風の刃が通過し地面に傷跡を残す。

悔しそつにこちらを睨む猿を目掛けて無数の触手を飛ばす。すると触手の横から風の刃が飛び触手を切り刻んでいく。斬られた触手は形を崩し霧散し消滅した。舌打ちをしながら着地し妨害してきた猿に黒火球を飛ばし牽制しておく。

牽制している間に接近してきた猿の攻撃をかわし、剣を抜き放ち斬りつけ、怯んでる隙に剣を突きだし頭を貫く。

再び横から風の刃が放たれるが、剣を引き抜き死んだ猿を蹴り上げ盾にする。風の刃は猿に当たり無数の傷からは血が撒き散らされ地面に染みになる。蹴り上げた猿が盾と目隠しになり俺は縮地で簡単に猿に接近することができた。長い腕を振り上げてくるが黒い触手が全身を貫通し絶命する。

「ふう、疲れたあ……」

俺は触手を伸ばし猿の死体を集める。一々拾いに行かなくて済むので楽だ。死体を集め手早く食事を終わらせた俺は、上を見上げる

が…空が、太陽が見えない。まあきつとお昼の時間帯ぐらいだろうとあてにならない腹時計で判断をし、今日の狩はここまで！！と拠点に戻り始める。

拠点に戻るとティアが湖で釣りをしていた。…別にティアの趣味ではない。俺が「肉は食い飽きたので果物や魚を採って来い」と言ったのだ。ティアはがくがくと何度も頷いて了承してくれた。やさしいなあ。

ティアは俺が帰ってきたことを確認するとすぐに釣り道具（ティアが自分で作った）を片づけて食事の準備に取り掛かる。…なんか癒されるなあ。

今まで拠点は俺が寝ることだけに使っていたが、ティアが来てからは随分と変わった。ホコリが積もっていた床は塵ひとつ存在しないぴかぴかな床になったし肉以外のそれも簡単ではあるが『料理』を用意してくれる。ありがたいなあ。

ティアが食事の支度をしている間、俺は暇になる。そこで俺は廃屋の少し離れた所に直径三メートル、深さ八十センチほどの穴を開け固める。そこに魔法で水を満たし水分子を振動させて40 ぐらいまで温める。

「風呂だああああ、やったああああ。…いやー意外と簡単にできるもんだなー」

俺は布きれ同然の制服を脱ぎ、湯に浸かる。

「あゝ ああああ、きんもちういいい!!」

突然奇声をあげた俺に驚きティアが調理を中断し様子を見に来るが、裸の俺を見ると顔を赤く染めて急いで逃げて行った。

…… かああわいいいいいい!!…… 落ち着こうか俺。

風呂の気持ちよさとティアの可愛さで死にそうになるぐらい興奮する。

いやあ、やっぱり風呂はいいなあ。浄化で綺麗に出来るけど、これからは風呂に入るようにしよう。

あまりに気分がいいので俺は鼻歌を歌いながら久々の風呂を満喫した。

「さて、そろそろあがるかな」

嗅覚強化された俺の鼻が旨そうな匂いを嗅ぎつけて腹を鳴らす。ティアの料理では魔力は得られないが別の何かが得られるのだ。

風呂からあがり俺は水滴を蒸発させ制服を着て匂いのもとへと急いだ。

第十六話

国王様と謁見をする前に僕と咲美ちゃんの所にはシルファさんが来ていた。

『国王様の前では勇者様らしく聖女様らしく振舞ってください。…急に召喚されて混乱しているのはわかっています。ですがそこを何とかお願いします!!』

シルファさんが必死に頭を下げてきた。僕はここに召喚されたということにいまいち実感が持てていないから混乱は小さい。しかし咲美ちゃんは大事な兄が行方不明になって一カ月立っている。精神状態がかなり不安定なはずだ。聖女らしく振舞えるのだろうか？

「咲美ちゃん、大丈夫？」

「晃さん…私は」

兄さんは行方不明。だめ、私が兄さんを信じなかったら誰が信じるの？きつと兄さんは無事だ。だから私は元気を出さなくちゃ。

「…わかりました。大丈夫です」

「お二人とも、ありがとうございます!!…そろそろ時間です。私は先に行きます」

そうして国王様との謁見は始まった。

国王様との謁見が終わり僕と咲美ちゃんは昨日案内された部屋に戻っていた。部屋には僕と咲美ちゃんのほかにもう一人シルファさんがいる。これからの予定なんかを話すそうだが僕は昨日から聞くうと思っていたことを聞くことにした。

「あの、シルファさん、聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「もちろんです晃様。それで聞きたいことは？」

「…昨日、僕と咲美ちゃん以外にもう一人召喚された人はいなかった？」

そう聞くとシルファさんは思い当たる節があるのか少し考える。

「…もう一人…晃様を召喚しているときに小さな引っ掛けりを感じましたが…確証はありませんがその可能性はあります。ですがなぜそのようなことを？」

「実はそのもう一人は咲美ちゃんの兄で僕の親友なんです。僕が親友…和馬って名前なんですけど…召喚されるときに和馬の手を掴んで巻き込んでしまったんです」

「なるほど…それならばおそらくは召喚場所の座標が狂ってしまい、ここではない別の所に出現しているかもしれません」

その言葉を聞き落ち込んでいた咲美ちゃんは少し明るさを戻す。

「兄さんは、生きているのですか？」

「大丈夫だよ咲美ちゃん。きっと無事だろうし、僕らと同じ世界にいるんだ。必ず会えるさ」

「咲美様、晃様の言うとおりです。咲美様のお兄様とは必ず会えます。元気を出してください！！」

僕とシルファさんに励まされ咲美ちゃんはなんとか元気を取り戻した。

「…シルファさん、最後に一つ聞いてもいいですか？」

和馬の心配はなくなった。僕はどうしても聞いておかなければならないことをシルファさんに聞く。

「僕たちはもとの世界に戻るの？」

「もちろんです晃様。すべてが終われば帰還魔法で帰ることが出来ます」

「本当ですか？」

重要なことなので僕は慎重に聞く。

「本当です。嘘はありません」

「…わかった。シルファさんを信じるよ」

「ありがとうございます晃様。…それでは晃様、咲美様これからの予定について話していきたいのですがよろしいでしょうか？」

「うん、わかった」

「はい、大丈夫です」

こうして僕たちは魔王討伐への長い、長い道を歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3879x/>

親友に巻き込まれて異世界に飛ばされた(仮)

2011年11月13日11時18分発行